

ミルクと檸檬



ミルクと檸檬

目次

ミルクと檸檬.....	02ページ
オマケ.....	18ページ

後書き
デレクターズカット版

読了御礼企画

ミルクと檸檬

「タイに行くんだ」

「は？」

話の前後と言うか、沈黙の透明感と言うか、そんな場の脈絡と空気にそぐわない土臭い宣言に、私は思わず顔を上げた。さらさらと屋上を風が流れて、耳の穴や頬をくすぐる。

「タイに行く」

深見隆弘は繰り返す。それから、彼の言葉の意味を上手くつかめずにいる私の方へ首だけ向ける。眉をひどく真剣に吊り上がらせて、それでいて口の端を浮足立つように緩ませて。

「タイに、行くんだ？」

私は阿呆のように彼を見つめ返し、オウム返しにぼやいた。浅く顎が上下する。左隣で眠りこける國枝えみりを反射的に揺する。驚きを分担してもらおうとする。が、その手は深見に押し止められた。

「寝かしといてやれよ」

腹を決めて、全てを悟り切ったような、ゆったりとした物言いだった。

「行くって、いつよ？」

「まだ決めてない」

深見はまた正面に向き直り、背中を貯水タンクの台に持たせかけた。それから両膝をだいて、達磨みたいに体を左右へ揺らし出す。く、く、く、く。押し殺した奇声。鳩がポップコーンを投げられて喜んでるみたいな。

私は風が持ち上げたスカートの裾を間持たせ的に正しながら、うん、と頷いて見せた。

ふうん、タイに行くんだ。ひとりで？ どのくらい？ どうして？ 観光？ 自分探し？ 日本に嫌気がさした？

スカートのプリーツの流れを目で追い、私は質問を飲み込む。訳もなく沈んだ気分になる。

右隣の馬鹿のテンションはやたらと高い。馬鹿だから転がり過ぎて、思いっきりパイプに頭をぶつけてまでいる。

どうしてこうも。苛立ちと共に沸き上がる焦燥感が胸を焼く。頭を抱えながらケタケタと腕を震わせて笑う深見がやたらと眩しく見えた。

なぜ、既に自分の中で何かを決めてしまった人というのは、いつも私を気後れさせるのだろう。決めてしまった彼らは周囲をものともしないエネルギーで前に進んでいて、それは魅力的な引力で、私は引きずり込まれないように必死になる。彼らのエネルギーに引きずり込まれたら、濁流に飲み込まれた木切れのようにもう二度ともとの世界には帰って来られないような、先の見えない不安があった。だから私は、風船のようにちぎれそうな希望を抱えた深見を不用意に質問で突いて破裂させてしまうのが恐くて、一步引いた距離から会話していた。

深見は和んだ視線を、私を飛び越えてえみりに走らせる。

「なあ、これ、まだ津森にしか言ってないんだ。國枝にも言ってない。まだ、内緒な」

視線を戻し、瞳を決意に固める。口の前でひょいと人差し指を立てた。

どうして？

私は言いかけ、前歯で無理矢理押し止めて、「了解」と答える。詰問を質問にをすり替える。「タイなんか行ってどうするの？」

私は手にしたパック飲料をすする。百円、五百ミリリットル、レモンティー。膝を正して、彼を見下ろすと、深見は綺麗に並んだ歯列をむき出して頬を弛ませていた。ピンクのしっかりした歯茎。私と目が合って、照れるように腕で顔を覆い隠す。半袖シャツから伸びるのは、肉体労働のアルバイトでうっすら筋肉が付いた腕だ。申し訳程度に筋肉を付けたなまくらなクラスの少年どもと比べれば、わずかに現実感があった。けれど、私はあまり好きじゃない。もっとなよなよして頼りない方が、安心する。これは、第二成長期を女子に先越される男の子の悔しさに繋がるような気がする。

「んー、日本じゃハタチになってもさ、」

寝転がったままズボンのポケットからタバコを出して火を点けた。すぐには吸わないで、細く糸を引くようにくゆり出す煙の先を眺めている。

「日本じゃ、二十歳になっても？」

深見は既に二十歳だ。高校に上がる前に一年、高校一年生のときに一年留年をしていて、成人式はまだただ同じ学年なのに私より二歳も年上。そして、半年後にはめでたく受験と卒業が待っている。

彼は煙ばかり気にかけて、なかなか次を言おうとしない。うつむく私の脳天は、七月の太陽にレーザーでじりじりと焼かれていた。日影へえみりを追いやり、私も腰をずらし、べったりとコンクリに背中を寄せる。

深見の煙草が縮んで行く。先っぽから焼けて長ったらしい灰になって、突然、ポトリ、と落ちた。元の形を保てず、めげたみたいな落ち方だった。

「ちょ——落ちたよ」

彼のスラックスに落下した灰を、慌てて払う。瞬時に反応したつもりだったのに、豆粒くらいの焼け焦げが残ってしまった。

深見の瞳がトリップでもしているように焼け焦げからスライドする。ぼんやりと私を捕らえる。

「ああ、すまん」

「大丈夫？」

機械的に謝る彼の、さっきとのテンションの落差は激しかった。『二十歳』というフレーズが原因だろうか。彼が何を考えているのかわからないせいで、私は不安になる。

「ああ！ 顔近付けてやーらしー。ササはあたしのものだよー」

深見の表情から彼を支配するものの気配を読み取ろうとしていると、背後からほっそりとした腕に巻き付かれた。腰にはたっぷりとした水枕も押し付けられている。華奢な体型のくせに体脂肪率二十四パーセントを弾き出す、國枝えみりの胸だ。

「えみり、暑いって」

彼女の腕を持ち、左右に背中を振ってみる。寝ぼけているのかえみりは、暑いのはいやー、とぼやきながら、食らい付く腕の力を増やす。彼女と接触している箇所がしっとりと濡れて来て、

汗が染みているのがわかった。

まるで、同化するみたいだ、と思う。

えみりの腕はとても細い。なのに、白玉のように柔らかくどこまでも包容して、私を吸い込み捕らえる。骨格がカンナで削られたように繊細なのだ。それで、彼女を乱暴に扱うことをためらってしまう。

「國枝あ、津森困ってんじゃない」

打って変わって相好を崩し、深見が私に顔を近づけた。緩んだ唇がめくれ、前歯から犬歯までが覗く。私の脇腹あたりに顔を寄せる。腕を伸ばしてえみりの耳をつまんで引いた。

「あーあ、頭ボサボサ」

「え？ まあ別にいいじゃん。それにここ、あたしたちしかいないしい、気にすることないよお」

「まがりなりにも女の子だろ」

「うわっ、女の子扱いすんだ。差別だ。深見くんよお、差別はいけないんだぜ」

中途半端な女の子扱いを、えみりははやす。

「なんでだよ。クソめんどくせえヤツだな。頭貸せって。あ、こら逃げるな」

追いかける深見の肩が、私の平たい胸にこすれて、どうしても、気付けば中立を止めて深見に加勢していた。

「せっかく綺麗に巻いてるんだから、もったいないよ」

「もー、ササまで言わないでよお」

どうしてそんなこと言っちゃえるかなあ、とえみりは冗談っぽく苛立ち、長く伸ばして綺麗にネイルした爪を爪で引っ掻く。飾りの小さなパールが剥がれて、唇を歪めた。すん、と鼻を鳴らす。

「クシちょーだい」

顔をもたげ、洋館に住まう猫のように、笑った。

えみりの将来の夢は、素敵な花嫁さん。「絶対にこの人と」そう確信した相手と結婚する。自分磨きや人間研究、二十四時間衰えない行動力など、目的のための努力は決して怠らない。自分に合う化粧や髪型の追求も、少しでも理想の相手がいそうな学校や遊び場に通り詰めるのも、全てそのためだけ。

私は最初、そんなの今時、時代遅れだ、流行らない、と一蹴した。彼女は怒らなかった。淡々と事実を述べるために俯いた。

「だってあたしは、ひとりで生きられないもん。あたしにとってひとりになるなんて、飢え死にするくらいひもじいことなの。でも、ササは強いよね、一匹狼だもんね」

ガストーブの火を調節して、えみりは窓の向こうを透かし見るように彼方へ視線を投げた。高校受験の一週間前。急に、志望ランクを上げて私と同じ高校を受ける、と言い出した彼女は志望動機に、結婚したいから、と答えたのだ。荒れ狂う風が、彼女の見る窓ガラスを打ち鳴らしていた。気温の冷たさを、暖かな室内になんとしてでもしらしめようとするみたいに。

「でも、結局はひとりなんだよ。私たちって」

私は反論するつもりで言った。胸の奥へ冷や水を浴びせられたように、何者かへ怯えながら。

「だからあ。そう言えちゃうのが強いんだってば」

鉛筆を模したシャーペンをコロコロと手放して、えみりは投げやりに伸びをした。

「ずうっと一緒だって信じたら、誰とだって、ずうっと一緒なんだよ」

「そうかな」

「そうだよお」

夢の中の砂糖菓子をなめるみたいに、語尾は甘ったるく引き伸ばされていた。

きれいごとを言わないで。漫画の中の台詞くらい実体のない美辞にしか聞こえない。これは、別れを惜しむ仲間に主人公が投げる言葉そのものじゃない。私は、ずうっと一緒なんて、フィクションでは有り得ても現実では有り得ないと、鼻で笑い飛ばした。けどもそれなら、えみりは主人公たちの叫ぶ言葉を、いつもどんな気持ちで受け止めているのだろう。考えながら、シーディーラックに並ぶ少年漫画の背表紙を眺めていた。

「信じるチカラは無限大～」

「信じてたって、受験は受からないよ」

「もお、またササはまたそうゆーんだから。リアリスト過ぎるのは、煙たがられるよお」

「もっと現実を見ろ。いつまでも志望校が希望校じゃ、なんにもならないんだよ」

「でも、このままの学力なら、合格圏内だって先生、四月におっしゃったじゃないですか」

「確かに言ったさ。否定はしない。だけど、このまま行けば、だ。あのさ、津森は高一からがり勉だったから、伸びしろがなくて受験勉強しても伸びないんだよな。逆に、クラブで勉強サボってた奴の巻き返しに追い越されたんだ」

模試の結果を、カマキリのように注意深く教師は値踏みした。さほど重要視もしていない生徒の結果は、ちり紙よりも軽く扱う癖に、出来のいい生徒の結果は徳川埋蔵金の暗文でもあるかのように隅から隅まで視線でなめつくす。そんな教師の生徒に対する成績差別をくだらないもの思いながら、私は自分の手首を握りしめた。

「津森。これは、大学受験なんだ。ひとつの大学に、全国から挑戦者が集まって来る」

丁寧な刃を研ぎ澄ますような言い方。

「はい」

私は頷く。いつもより、結果を検分される時間が短かったような気がする。もはや、挽回は期待されていないのではないか。

「津森はたまに授業をサボるよな？」

カマキリが鎌を構え、私は思わず首をすくめそうになった。

「はい」

「津森ほど勉強家になって来ると、授業なんてどうでもいいのかもしれない。だが、そこまでごたいそうな頭をしているのか？ 授業は無駄か？ 違うだろ。津森。塾の方がわかりやすいとうそぶくような奴にはなるな。学校の授業でも学べることはまだまだあるはずだ」

「はい」

鎌は私の鼻先を、緩やかなスピードで振り落とされて行った。ゆらゆらと切れ味悪く分断された空気の破片。教師とて、わかっているのだろう、何十年も、ただ学習要項をなぞるしかして来なかった自分たちの授業の無価値さが。いまさらシステムも変えず受験受験と叫ぶ方が無茶なのだ。ご老体に悪い。

「もう少しちゃんと真面目にやれ。春からみたいな甘い心構えじゃ駄目だ。このままじゃ、滑り止めすら危ないぞ」

「はい。わかりました。ちゃんとします」

教師の実のない小言が鬱陶しくて、事務机の上に置かれた模試の結果を引たくって頭を下げた。えみりの言う通りだ。現実を見ないリアリストの言葉程、うざったいものはない。

散々だったらしい模試の結果を見る気にもなれず、大手塾発行の合格判定用紙はぐしゃぐしゃと破れて折れ曲がるも構わず靴へ突っ込んだ。火曜日の授業メニューなんか知ったことじゃない私の学生靴はぺらぺらの一步手前。中には靴のぬしと化した細いペンケースと、日替わりで入れ代わる参考書の五分の一の切れ端。革製のためそれでも重たい靴を、忌ま忌ましく思いながら床へ置く。下駄箱から革靴を引き抜く。左右の肩甲骨の中央から首の後ろへかけて、凝ったように筋肉が痛かった。私は職員室で、相当気を張っていたらしい。たゆまぬ努力の退化が成績の下落だなんて、ショックでしかなかった。

「津森さん」

靴に足を押し込んで、だらしなくつま先をコンクリに打ち付けていると、隣に立った学生に私の名前を発音された。どうにも私の名前を呼んだとは思えない、呟きのような声。隣を見れば、白いシャツから無体な雰囲気骨っぽい腕が伸びていた。白樺のようだ。いや、海に沈んだ白骨死体そのもの。彼は相変わらず誰かの下駄箱に視線を固定したまま、再度、ツモリサン、とぼやいた。熱のこもらない独り言。

「津森だけど？」

何気ない驚きのクエスチョンマークを語尾につけたつもりだったが、さっきまでの不愉快が多分に溶けだしていたらしい。彼はびくり、と肩を震わせた。

「すみません。すみませ、すみませ、」

頭を上下にがくがくと動かす。漆黒のさらさらとしたストレートで、野暮ったいばかりのマッシュルームヘアが華麗に空中を踊る。前髪が極端に重たくて長く、目は見えない。鼻の先っちょがかろうじてうかがえる。

「ちょっと、あなた、何も悪いことしてないじゃない。謝らないでよ」

「すみませ、すみませ、すみませ」

足取りの乱れた行進のように余分に三回も頭を下げてから、彼はようやく姿勢を正した。と言っても、身構えた風な猫背だったが。

「何か頼まれもの？」

全く知り合いでない生徒なのに、腫れ物のように扱わねばならないのがまだるっこしい。見上げた彼の背は高校生男子にしては低く、顎が少女のように尖っていた。ぷっくりとした赤い下唇のそれが、より可憐さを助長している。白雪に墮ちた椿のようでもある。軟弱な物腰とあいまって、他人の嗜虐心を煽るところがあった。

「いえ。少し、お伝えしたいことがありますて」

「伝言じゃなく？」

「はい。俺個人の用事です」

彼の声は小さく、強弱もなっていなかった。もっとはきはきと発音すればいいのに、フニャフニャと腰砕けの猫みたいに言う。

「ひとつきいていい？ 名前、何て言うの？」

床に置いた靴を持ち上げ尋ねると、彼は口の端を下げて首を傾けた。左手でぎゅっと前髪を引

っ張る。

「津森さんと同じクラスの、小里悠志郎です」

弁解させて頂けるなら、私は、彼の名前を覚えなかった訳でもないし、忘れた訳でもない。ただ、知ろうとしなかっただけだ。

「ごめんね、わざとじゃないから。高三にもなると、親しい人とだけでだいたい間に合うし……行事とか」

「驚きました」

前髪をよじりながら引っ張って、悠志郎は道を折れた。手を合わせ腰を低くする私の方へは、ちら、とも視線をくれない。舗装された簡素道路が、プランターで道半分を塞がれた裏路地に代わる。人に見られたくないから、と言われて通学路を外れてから、たった数百メートルしか歩かないうちに、全く馴染みのない生活臭が漂い足元で淀んでいる。油料理のにおい。甲高い子どもの泣き声。はためく穴のあいた洗濯物。知らない政治家のポスター。行く手をはばむプランターは、だいぶ前に主人を失ったのか、雑草に土壌を奪い取られ、しっちゃんめっちゃんに踏み荒らされている。ブロック塀には、ジュースの空き缶やらストッキングのビニール袋やらが、黴のようにしがみついていた。犬猫の獣臭もこもっている。眉間と鼻にしわが寄る。

「ついて来て下さい」

あまりの空気の淀み具合に躊躇っていると、先をずんずんと歩いていた悠志郎が困ったように振り返る。

「やっぱり帰りますか？」

「ううん」

この男なんかに、怖じけづいたと思われるのもしゃくに触った。

「でも、靴が汚れそうじゃない？」

「気をつけて歩けば大丈夫です。多分」

「わお。テキトー」

「わお」

おどけて見せたらしい小里悠志郎の背中に、両手でメガホンを作って、馬鹿じゃないの、と呟く。

家三軒分の路地を抜けると、やや広まった空間が現れた。けれどやはり狭く、まだ、窮屈な感じが残る。プランターから溢れ出した名前の知れない雑草は、地を這い蔦と絡まり合って、ついに地面を深緑で覆い尽していた。それらはどん詰まりに位置する民家の物干し竿に向かって集結し、すだれがごとくしなだれかかっている。蔦のタペストリーでヒルガオが白く小さな花を開いていた。絵本の中のさびれた空き地。その丸い空間へ一歩踏み込んだ途端、ガラスの破片を靴の裏で砕いてしまい、私は舌打ちした。空は魚眼レンズ風に切り取られていて、足の裏がふっと重力を失うような感覚に襲われ立ち眩む。

「それで、用件なんですけど」

悠志郎はこちらに向き直り、落ち着かなげに足を踏みかえた。彼は前髪を今までで一番強く振っている。前髪がこよりのように引き攣れている。髪と髪のすき間から私を見上げる瞳が見えた。ひたすらに後ろ向きな革命家のように卑屈な上目使い。世を憐れみ変化を叫びながら、周囲か

らは疎まれ幽閉されて今に至った亡霊がごとき。

「さっきの今であれなんですが」

さらに髪の毛を捻る。プツプツプツッと嫌な音がした。

「付き合って貰えませんか、俺と」

悠志郎が顔を上げる。彼はしばし視線を虚空で徘徊させた後、抜けた髪の毛の絡まる右手を見て、情けなさそうにまぶたを開いた。

小里悠志郎に教えたフリーメールアドレスに着信があった。夏休み最初の月曜日に会えないか、という問い掛けに、先約があると返信して、翌日私は早起きする。台所でもくもくと卵焼きを作り俵のおにぎりを握って、プールサイドでレンタルした浮輪を膨らましていたら、子猫が足にまとわり付いた。

「お姉さん、あっちのスライダーに乗りましょう」

子猫と書いてキティと読む。子猫は十歳くらいの、ぱっちりした瞳と丁寧に編み込まれた髪型がませた印象を与える女の子。目の覚める青色に白い大きなリボンをあしらったビキニを持ち上げる胸は、ちっとも私に負けていない。背筋はぴっしりと伸び、言うことも上品で、親が相当教育熱心であることがうかがえた。名付け親は誰だろうという疑問だけが残る。

私たちは、夏休み初日の、うかれた三月ウサギでごった返す人間プールを泳ぐ。年がら年中雨ざらしの汚れたタイルが、人間の体液や嬌声と化合して、炎天下に溶け出している。コールトールのようにどす黒いそれが素足にびちゃびちゃと跳ねるから、私は忍び足で歩く。

「今日はお父さんと遊んであげる予定なの。でも、代わりにお姉さんとプールで遊んであげるわ」

「お父さんと会わなくていいの？」

「あの人とは駅で待ち合わせをしているわね」

「お父さん、待ってるんじゃない？」

「あら、駅で待ちぼうけをくらうのは、子猫よ。あの人は絶対来ないわ」

私が持つ浮輪にしがみつき、子猫はウォータープルーフマスカラをしっかりとつけたまつげをしばたかせる。やわらかな頬に深い影が挿す。生唾を飲んだ私の気配を察知したのか、彼女はさっとマスカラを上げた。大きな瞳が私を捕らえる。共犯者めいた笑みで唇を綻ばせる子猫に、私はぎこちなく笑い返した。

「嫌なこときいてごめんね」

「いえいえ」

彼女の髪が私の腕でこすれて解けて行った。節足動物のように、子猫の熱い腕が絡まり付く。「嬉しいのよ。お姉さんのお弁当を頂けるのでしょうか？」

「もちろん。四時半に起きて作ったから。まあ、彩りは自信ないけどね」

仲の良すぎる姉妹のふりをして、私たちはスライダー乗り場へ上がる。膨らました浮輪を係員に預け、順番に滑った。阿鼻叫喚の叫び声を上げる。未来と言う確固としたレールの存在を吹き飛ばすように。首を振る。頭を抱える。体を丸める。何度も繰り返し高速で滑り落ちた。

お昼に手製のお弁当を広げ、午後からは流れるプールにずっと流される。ぐるぐると、生首の浮遊する高密度空間で同じルートをなぞる。私は浮輪に寝そべり、子猫は浮輪ではなく私の首にしがみついている、それが視界から不必要な他人の存在を遮ってくれた。人口密度が半減したように風通しが心地良い。私はまぶたの裏に滲む太陽の熱を顔面で受け止めながら、意識を眠りの縁へ旅立たせた。眠りたかった。誰かと、けれど、たった独りで。

「今日はとても楽しかったわ」

帰りの電車の中で、向かいの座席に腰を下ろして子猫は髪を整える。首をはずに傾けて、片側に手櫛で髪を寄せる。

進行方向に対し平行に並んだシート。彼女は急に私と距離をとり始める。ふたりはひとりに戻って、私は心の小骨を取っ払ってくらげになった。子猫といっても深見やえみりといっても感じる小骨。私は私を彼らに対して作っていて、それは偽物の体のいい姿でしかなくて、着ぐるみはふとしたきっかけで水風船のように弾けてしまいそうだ。私を演じているのだという自覚や緊張やストレスが、秒を日を刻んで結晶し、胸につかえる小骨になる。そしていつか、内側から亀裂して黒く淀む油を撒き散らす。臭気を放つ化け物になる。

「ねえ、この水着、お姉さんもらってくれない？」

「え？」

差し出される水着の入ったナイロンバッグ。そこには、記憶に響く子ども服ブランドのロゴ。BETTY'S BLUE。

「もらってくれない？」

電車に合わせて、通路の向こうでピンクの水泳靴が揺れている。

「もらえないよ。ルールだから」

「おかたいなあ。でも、だから安心するんだよねー」

破顔。水泳靴を大切に抱えて体を折る。長い髪が肩からパラパラと落ちて、楽しそうに口を開けた彼女を覆い隠した。

「ごめんね。もらってあげたいんだけど」

「うん、うん、わかってる。わがまま言ってごめんなさい」

「今度またメールしてよ。子猫の好きな梅シソの卵焼き、また作ってあげる」

「ひっどい。卵焼きは甘いのがいいの！」

電車が終点に着く。私たちは温まった会話の熱と、薄氷の浮かぶ気遣いを酌み交わしながら、手を振って別れた。親しい友達を装って。

笑顔の名残が残る頬のまま、携帯電話を開いてフリーメールアドレスの着信をチェックする。悠志郎からの返信はなかった。差出人が子猫のメールを選択し、依頼クリアをもって削除する。件名は『プールで遊びませんか？』

何気なく振り返った。人混みの向こうに、ピンクのバッグがひらめく。子猫の手が駅のごみ箱へそれを捨てた。乱暴に押し込むように。

彼女の横顔に、笑顔はもう残っていない。

私と子猫の関係は、とても刹那的だ。互いにどこの誰かも知らない。子猫が本当に子猫という名前なのかもわからない。私たちは、私たちをつなぐ情報を交換してはならないし、記念に何かを残すことも許されない。なのに、レズビアンのようにベタベタと接触する。まるで、味の濃い安物のジャンクフード。

「ごめん」

雑踏に紛れるように小さく誤った。

私は、小里悠志郎を、このルールの中へ組み込んだのだ。

ピンクのラインマーカーが走る。それを持つ手にほどこされたネイルは、向日葵色のフレンチ。てんとう虫やスイカが爪の一枚一枚についている。国枝えみりと、ピンクのマーカーだらけな彼女の塾のテキスト。冷房の効き過ぎた寒い、窓のない教室。私は、彼女が通う塾の夏期講習に来ていた。金魚のように口を開閉してみる。オフィスビルにすし詰めされているという事実が閉塞感を生み、私を息苦しくしている。

「うわーん、覚えられないよお。ササ、どうしよお？」

えみりがぼったりとテキストに倒れ伏した。丁寧に平巻きされた栗色の髪が、机からこぼれる。横長の五人用デスクだ。教室内に横三列縦七列配置されている。この教室は百五人収容出来るらしい。その教室の中央の机の真ん中にえみりは席を構え、私は金魚の糞のように彼女の左隣に座っている。

「じゃあ、どれだけ覚えたか、問題出し合う？」

「うんうん、するする。それじゃあ、あたしから問題出すね」

急な立場転換に目をしばたかせつつも、さあどうぞ、と私は胸を叩いた。えみりが日本語を読み上げる。私はそれをアルファベットに変換して、ルーズリーフに書き出す。あまり難しくない単語だった。次第に集中が離れ、周囲の会話がぼつぼつと耳朶の辺りで泡を結び始める。何か、気になる言葉が聞こえて、目線をあげた。そのまま、ある一点に吸い寄せられる。小里悠志郎。私服姿の学生が放つ警戒心を内包して排他的な空気に気圧され、呆然と立ちすくんでいる。髪はいじっていない。代わりに、白い皮膚へ咲いた赤い唇をつまんでいる。無意識なのか、深く爪を立てていた。

「決定的な」

手がシャーペンを操って自動筆記する。

「明らかな」

私はじっと彼を見ていた。深い帳のような前髪の奥の瞳を探っていた。

「致命的な」

悠志郎の鼻先がこちらに向く。唇から爪を離す。シャーペンを持つ手に力が入った。視線は交差しているのかいないのか、彼も茫洋とした口元のまま、数秒を数える。私は空唾を飲み込んで、隣の席に目をやった。私の左隣は通路側の空席。ゆっくりとまばたきする。混み合った教室で、ちょうど席が空いている。

「絶対的な。ねえ、ササ！ 絶対的な！ 大丈夫？」

「え？」

右腕を強く引かれた。黒く垂れ目のアイシャドーを施した目が、懸念に吊り上がっている。黒目というよりは白目に凄まれて、私は正気を取り戻した。

「うん、大丈夫。なんか喉が渴いたなーって思って。この教室、時計ないんだね。今何時？ 時間ある？」

「今あ？」えみりは、飴玉を舌先でもてあそぶように唇を尖らせる。ブレスレットのような時計を見ようとして止め、慌てて鞆から携帯を出す。

「やばいやばい。電源切るのが忘れてた。ラッキー。ありがと、ササメちゃん。えーとね、始まるまでに五分とちょっとあるよ。ジュース買って来たら？」

自販機はすぐそこだよ、と腰を浮かせ教室の入り口を指で示した。

「講義始まったら長いよお。休みタイムは五分だしね。今、いっとけいっとけ。ついでに紅茶花伝頼んます」

「それが腹か」

チョップで彼女の脇腹をくすぐってやった。

「買って来るね」

「ありがとー」

私は財布を持って立ち上がろうとして、驚き、尻を落っこす。左隣の席で、悠志郎が突っ立っていた。彼は慌てて机に置いた自身の鞆を取り上げる。執事のようにさっと通路を開ける。

私は、腰が抜けて立ち上がれなかった。

「あなたもジュース飲む？」

固い木の椅子に腰を落としたまま、苦し紛れに口を動かした。

大人になれば、ニキビはなくなると思った。

それが間違いだと気づいたのは、ニキビ用洗顔料のシーエムのせいだ。どうやら、二十歳を越えて成長が止まり終わりのない老化が始まって、ニキビは顔に湧くらしい。だからニキビは、思春期の象徴でも花盛りの代名詞でもなんでもなくて、私たちが始めに経験する老化であり劣化なのだ。

私たち三人は通路側から、私、悠志郎、えみりの順番で黒板に向かっていった。こうなったいきさつはこうだ。俺はいりませんと頑固に首を振る悠志郎を私は笑顔で脅し、缶ジュースを三人分買って戻ったら、講義は既に開始していて、衆目の不可解げな視線とボリュームマックスの怒声を浴びた。首をすくめ缶ジュースを腕で隠しながら謝罪を唱える。早く席に着かねばチョコレートか講師が飛んで来そうな剣幕で、私は後先考えず悠志郎を奥の席へ押し込んだ。

授業開始から二十分。心のペースを取り戻した私は、黒板を見るふりをして悠志郎をうかがう。悠志郎は背中を、定規を宛がわれたかのように伸ばして緊張していた。彼の血管が透けて見える白い肌には、唇以外に紅はない。きっと前髪をあげても吹き出物や痘痕は無く、滑らかな肌が続いているのだろう。小さなニキビが絶えず額に浮いている私は、はあ、とため息をついた。ぴくり、と悠志郎の小指が痙攣する。その向こうでは、えみりがシャーペンでルーズリーフに落書きをしていた。スヌーピーらしき犬に吹き出しを付けている。小さな字でちょこちょこ書き込む。シャーペンの頭で悠志郎をつつき、彼へルーズリーフをずらす。悠志郎は近眼なのか髪が邪魔なのか、顔を近づけてそれを読んだ。前髪が紙にこすれてパリパリと鳴っている。晴れた日のわか雨の音。首だけ回して、悠志郎はえみりに目配せをした。えみりは、洋館に住まうお嬢さんの微笑みをたたえ、ルーズリーフへ指を置く。曇る所のない完璧な爪。

喉元に悲しみが込み上げて来た。深淵から湧き出す清水のようにたぷりたぷりと波立っている。その中に浮いた心臓も、不安定に揺れている。私は化粧っ気のない自身の爪を見た。老婆のように筋が走り、丸く、艶もない。

——どうかしてる。

私はシャーペンの先を親指に突き刺した。眼球を黒板へと戻す。メリメリと糊の剥がれる音が脳内で響いた。

ファーストフード。私はファーストフードが大好き。店に寄って、頼んで、かぶりついて、はい、オシマイ。全国津々浦々どこでも変わらない味。家で晩御飯を食べるよりかは、外でこれを食べる方が好きなのは、食べ慣れてしまったからかもしれない。濃いケチャップの味が、私にとって第二の家庭料理。黄色いエムの印さえあれば、私はいつでもどこでも家に帰って来れる。

透明なプラスチックのカップに入ったサラダを先の割れたスプーンですくう。シャキシャキと歯ごたえを味わいながら、私は、向かいでもくもくとビッグバーガーを分解するえみりに気が重たくなった。苦手なピクルスだけは紙ナプキンによけていて、彼女が特別放心状態でないと知れるのが救いだ。

「えーみり。ピクルスとクルトン交換しよっか？」

努めて明るい声で、ピースポーズまで決めてみたのに、反応は暗かった。

「いいよお。捨てるし」

紙ナプキンでピクルスをぐちゃぐちゃに包んで、テーブルの端に置く。うつむいたままの、えみりにしてはかなり素早い動きだった。バンズをちぎって上品に口へ運ぶ。口の周りにケチャップを付けないための彼女独自の食べ方で、指が代わりにケチャップまみれになってしまうのが特長だ。

「ササメちゃん」

二口めのバンズをちぎろうとした途中、えみりは食べることを止めた。

「どうしたの？」

ハンバーガーに視線を落としたままえみりは、まばたきもせずじっとしている。感情を持って余しているのか、顔面筋はなんらの表情も結ばない。彼女のこんな沈んだ姿を見るのは初めてで、私は何度も腰を浮かせそうになる。

「悩んでる？ それとも、妥当にお腹痛い？」

「悩んでる。ササメちゃんにちょっと怒ってる」

「私に？」

「うん。でも、どうやって気持ち言ったらいいかわかんない。だから、ごめんね、デリカシーないけど.....ササメちゃん、小里君と付き合ってるでしょ？」

「え？」

いったい、いつ私と悠志郎が付き合っていると、彼女は思ったんだろう。

「ごっめん。言ってなかったね、私、あの人と親ぐるみの付き合いでさ。いいなずけとかだったり？」

サラダをスプーンで掻き混ぜながら、私はおおげさに照れて見せた。

「なんちゃって。冗談だよ。嘘、嘘。もしかしてさっきなんか言われたの？ 嘘だって。付き合いってなんかないよ。あの人勝手に、」

「ササメちゃん！」

えみりが髪を振り回す勢いで頭を上げる。感情がそこから破裂してしまいそうなくらい目を見開いて、奥歯を噛み合わせた。

「なんで？　なんでえみりに教えたくないの？」

「教えたくないわけじゃ……だって実際、付き合っていないわけだし」

「えみりは、信じられないの？　ササメちゃんの友達じゃないの？　なんでそこまでして隠すの？　なんで小里君なの？」

さらに瞳は拡大して、私を飲み込むように思えた。彼女を必死たらしめているのは、悲しみなのか、怒りなのか。伝わるのは彼女のエゴ。この巡り来る状況すべてが納得出来ないという、強い訴えであり、私の交流関係にコンビニ感覚で踏み込んでしまえる、過度の近しさだ。

「えみりは、友達でしょ。違わない。ごめん。えみりには言っとくべきだったよね。ごまかしたりしたら、嫌だよね。私も落ち込むよ、隠されたら。ごめん」

潔く否を認める。手を合わせ頭を下げる。ささいな引っ掛かりでも引きずりたくはない。相手に嫌な思いをさせたら、まず謝罪。自主すれば刑は軽減されると知ったときからの方針。

「謝らないで。ササメちゃんは、どうしてそんな簡単に誤っちゃえるの？　あたしに言えない理由とか、あるんでしょ？」

「理由は……」

私は濁すように言葉尻だけを捕らえた。

えみりの曲がることを知らない無垢な信頼を筒抜けにする瞳が、私のまぶたを伏せさせる。信じる力を持つ彼女は私の故意も怠惰も疑わなくて、私の意思を凌駕する不測の事態の存在を信じている。彼女の瞳のフィルターを通して映る私は、とても純真だ。

「理由は、ないよ」

まばゆいばかりの自身の虚像に堪えられず、私はそれを砕き割る。純真な私を間違えて信じてもらいたくはない。こんなことを繰り返せば、人とすれ違う度に私は違う私になって、違うイロの私が生まれる。虹よりもたくさんのイロが画用紙いっぱいになり、なにもかもを黒く塗り潰してしまうだろう。それは、化け物だ。宿主である私はコントロールを失い、化け物は巨大な意志を持ち暴走する。

えみりの瞳にじわり、と熱が滲んだ。激痛をこらえるように笑う。

「うん。だよね」

曇りのない彼女の声には私は、粉々にしたはずの虚像がまだそこにそびえているのを見た。軽い目眩を感じた。

「でもね、いい、ササメちゃん？　なんであんなよくわからない男と付き合うのよ？」

彼女は抱えている懸案をまたひとつ、ケーキのように切り分ける。ペットをしつけるようにえみりは、辛抱強く一言一言を強調した。彼女は組んだ足を崩し、ケチャップのついた指のまま、私の手へ手を重ねる。

私はうろたえた。

「よくわからないって……えみりこそ見た目で判断するの？」

「あたしは、見た目でなんか判断してないっ！」

突然、語尾が跳ね上がった。私の手へ力がかかる。

「じゃあなんで、」

「見た目で判断してるのはササでしょっ！ あたしはササのために言ってるの！ 後で悩むのはササなんだよ？ ササも小里君も傷付くんだよ？」

眉間にしわをぎゅうぎゅうと寄せたえみりに言い諭されて、私の何かはち切れた。ただただ煩わしく鬱陶しいと思う。

「なんで付き合ったばかりなのに、別れるみたいな言い方するの？ 私はそんないい加減な人間じゃない。えみりが気にする筋合いない」

「あたし、別れるなんて言ってないじゃん。思い込みで勘違いしないで」

思い込みで勘違いしているのはえみりの方で、私じゃないんだ。私は虚像へ必死になって拳を落とす。何度も。それは硬く、いつしかえみりの姿に入れ代わっている。それに気付きながら、私は止められなかった。腕を振り下ろすことの快感に、私は憑りつかれていた。

「言葉の裏が言ってるんじゃない。どうして私が後で悩まなきゃいけない訳があるのよ」

「タカヒロのことはどうなるの？」

「どうやったら、そこで深見が出て来るのよ！」

私は叫ぶ。濡れ雑巾を食えと言われた女のように、惨めな気分で。

「タカヒロは、ササメちゃんのことを好きなんだよ？」

「嘘！ 誰に吹き込まれたんだか知らないけど、言わないで！ それともえみり、ひがんでるの？ くっ、だらない」

「ひがむ？ どおしてあたしが？」

両手を強く握りしめ、えみりはまなじりを吊り上げる。白目の割合がさらに広がった。

「わがままにより好みしてるから、いつまでも相手が見つからないんでしょ？ 普段私関係ないです、みたいな顔してたくせにって、許せないんでしょ？」

犯罪の証拠をつまびらくように得々と喋っていると、次第にえみりの表情から血の気が失せて来た。釣り上がっていた眉が下がり、頬からは力が抜ける。瞳だけが髑髏のそれのように、大きく開いたまま残った。

「ササメちゃん……」

引き裂かれた宝物を前にしたようにささやく。私はそれを、視線をはずして落として無視した。言い過ぎた。

後悔が冥い海のように満ちて来て、くるぶしを飲み込んだ。足の指をぎゅっと曲げる。

ごめん。そう、言えばいい。そうしたら、仲直りのきっかけが生まれる。だが、言う気にはなれない。えみりは、悩めばいい。苦しめばいい。意地の悪い気持ちが私を飲み込む。

「ふ」

口の端が思いがけず笑みを吐き出した。手の平でそこを押さえながら、私は喉を意識して震わせる。

「私って馬鹿みたい。自分がこんな最低な人間だと思わなかった」

えみりの表情を見れず、俯く。

感情的にえみりを罵って、だけど謝る気は毛頭ない。今この瞬間初めて知れた自身の本性が、軽蔑に値するものであったせいで、受け入れられずに苛立つ。

「あーあ」

苛立ちを言葉にして発散させた。ぐちゃぐちゃと混じり合ったエゴと後悔は、少しも分離しない。

「えみり。私を軽蔑していいよ」

私は、真っ先に自分で自分を軽蔑する。そして、地獄に堕ちればいい程のただ甘い親バカぶりを発揮して、自分を慰めた。私は最低じゃない。

席から立ち上がる。赤い目で私を仰ぐえみりを視界から必死で追い出しながら、荷物をまとめた。財布から千円札を出す。テーブルに置いて、バイバイ、と小さく言った。

胸が冷えている。冥い海の底に沈んでいる。私の性根を覆うウェットスーツが、ひっそりと浸水を始めていた。

空は、とても大きい。高く、果てしなく、広がって、地球上どこへ行っても私を見下ろしてくれる。私は屋上の柵に手を絡め、地上よりも彼方にある空の行方を見上げた。ブルーとも水色とも表現出来ない、深みのある空の色。大気中の塵が光を反射して生み出す、神秘の色。底抜けの虚。ここからダイブすれば、宇宙まで行けそう。私はまばたきもせずじっと空を見上げていた。太陽光が目にはんで、目尻から涙が伝う。

「津森」

背後より声をかけられる。けども私は、聞こえないふりをする。空へ急落下してしまいたいと思う。

「こっち向けよ、津森」

声に力が入れられた。

「あ、深見。今日、ものすごく空きれい」

今気付いた、という感じで体の向きを変える。空へ腕を伸ばして人差し指を立て、柵に背中を当てる。飛び降り防止のため、柵は三メートル近い高さがある。

「そうだな」

火のついていないタバコを奥歯でくわえた深見は、苦く笑った。私に調子を合わせて和やかな空気を保とうとしていることが伝わる。本当は、呑気に空を見ている私に苛立っているくせに。

「雲ひとつないね」

「ああ」

私は目一杯顎を持ち上げる。目に太陽を入れる。泣け、私。もっと泣け。来るべき処刑のために。

私たちがいる誰のものとも知れぬマンションの屋上を、緩やかに風が抜けて行く。干された洗濯物がはためく。目尻を伝った涙は、こめかみからの汗と混ざり合い、湿った耳の裏を滑って行った。今日は快晴。真夏日。

「深見、また焼けた？」

「焼けた？」

「日焼け」

「ああ。そうだな」

「何してるの、アルバイト？」

「鹿児島の旅館でさ、掃除したり道案内したり」

「ふうん。私のために、桜島からわざわざ飛んで来たんだね」

「……ああ」

返事に間があった。私は両の目から次々と涙を流す。眼球が、痛い。

「そんなに好きなのに、なにも告白してくれないんだ。嘘、ついちゃうんだ」

反応はない。意表を突かれたからか、身じろぎもしない。もしかしたら、私が何を言っているのか理解していないのかもしれない。深見が自分で撒いた種だと言うのに、悠長なことだ。

「タイ、行くんでしょ？」

私は話題の転換を計る。これからひとつの方向へ向けて話題が集約してしまう前に、訴いておきたいことがあった。

「行くよ」

「どのくらい？」

あの日あの時屋上で、一番尋ねたかった質問。やけくそも混じってか、案外すんなりと訴けた。

「二週間。もし本気になってうまくいったら、一年以上」

「ふうん」

「なんだよ」

そうか。いつ帰るのかは、深見自身、決めていないのか。

柵に両腕を通し、ずるずるとその場にへたり込んだ。焼けるコンクリートが、私の太股に張り付く。視線は空へ向けて一直線のまま。

「どうして行くの？」

深見はため息とも発声とも付かない息を喉から押し出した。膝下丈のパンツのポケットからライターを取り出し、火を起こす。

「暑苦しいなあ」

「悪かったな」

タバコに火を付けて、吸った煙りを空へ吐き出しながら歯を見せた。にやにやととろけた笑顔。

「ケジメ付けに行くんだよ」

「何に」

顔をどちらに向けたらいいのやら、上や横や足元に目線を巡回させながら深見は言い、恥じ入るように落ち着かない彼へ私は、端的に質問を重ねる。

「だからさ」

「うん」

「だから、」

私はぴったりと彼に瞳を合わせた。深見が何を考え何を思い何に悩んで日々を生きているかなんて興味の埒外だ。けども、日本に深慮を残して異国へ旅立つ、彼の意志は知りたい。タイに彼が何を求めているのか、知りたい。

「津森こそ、そのだらけた姿勢、どうなの？」

「まあまあ。本題の尋問は、首洗って待ってますって。だから、ご回答、どうぞ」

ここに彼から呼び出された理由。それに意識を馳せれば、甘酸っぱい気持ちになんかなれっこない。せいぜい今のうちに、早めの意趣返しをするのでいっぱいいだ。

今度こそ深見は大仰なため息をついた。タバコをコンクリートに落とし、靴の踵ですり潰す。「ハタチになりに行くんだよ。日本じゃハタチになっても、たった一時間成人式出て終わりだろ。なんかさ、呆気ないんだよ」

「それは、何となく思った。でも、それが日本で成人するってことでしょ」

深見は額を手の平ではたき、目を覆ったまま空を仰いだ。

「さっすが津森。お前ってさ、ホントさ、冷たいよな」

「は？」

自分にも聞こえないくらい小さな声で、疑問をていす。自覚症状は言われるまでもなくあったから、強がりにもならない。

「友達無くすぞ」

「別に」

深見から顔を背け、背後の地上を眺め遣る。車も人も何もない道路が伸びていた。

「タイにはさ、出家制度があんだよ。出家して、一週間でも二週間でも修行しておかないと、社会的に大人として認めてもらえないんだ」

「そうなんだ」

一週間でも二週間でも修行しないと大人になれない。逆に言えば修行さえすれば簡単に認めて貰えるわけで、きっとそれはタイという国において帰依心が既に形骸化している可能性を示す。世界中どこへ行っても、わずかな例外をのぞいて、成人儀式の体裁化は避けられないのだろう。多分、通過儀礼と言うのは昔からそうでしかなかったはずで、またそのようではなかったはずで、なんらかの手順を踏まえれば一面クリア、という単純なものではないはずだ。彼が持っていたはずの前へ突き進むエネルギーは、急速に衰え、弱々しく明滅する。

「タイで成人式なんて洒落てるね」

「洒落てるとか、そういう感覚、おかしいだろ」

「そうかな」

「おかしい」

深見は当たり前だと言いたげに首肯する。

「タイに行くこと、えみりには自分で言ってよ。私に期待しないでね」

「期待なんかしてねえよ」

これは過剰表現だったと考えたのか、深見は言い足す。「自分で言うべきだと考えてる。国枝のことは、津森、お前が一番向き合うべきじゃないのか？」

「なぜ？」

額を反らし、反抗的に問う。

深見は私の隣まで来てしゃがむ。前傾姿勢で、両膝に肘をつく。彼の影が私に落ちた。

「国枝に何を言ったんだ？」

「何も？」

沈黙が降りた。私は膝を抱えたいくなるのを、柵へ通した腕に力を入れて堪える。

「ひがんでるんでしょって言った」

肺の奥底から、震える息が出る。

「国枝は、」

深見はがりがりと後頭部をかく。

「軽蔑しろって言われたのが堪えたらしい」

私は、自分の肩が競り上がるのを感じた。胎児のように体を丸めて耳をふさぎたいと願う。そ

の気持ちを抑え、柵にしがみつく。

「あいつ、そんなこと出来るヤツじゃないだろ。誰かをひがむ気持ちも、持ち合わせてねえよ」
うなだれて、目を閉じる。鼻の奥が痛んだ。

「深見が悪いんじゃない」

「はあ？」

「深見が嘘つくからでしょ。本当はえみりが好きなくせに、どうして私が好きなんて言うのよ」
深見がそういう嘘をつくのは、えみりの恋愛観が故だ。彼女は現実の異性を追いかけない。彼女が追いかけるのは、いつか現れる理想の王子様。

「そう言った方が自然だろ。今はまだ、津森越しに国枝といわれれば、俺は満足だし。どうこうなりたいて言うには、準備がな。津森は国枝に酷いこと言ったって思わないのか？ あいつにとってお前は、友達よりも大事な何かだ」

「無愛想で何の旨味もない私とずっと一緒にいるから、そう思うの？」

「違えよ。津森のことで相談する相手が俺って、変だろ。お前以上に気が合うヤツはいないって証拠じゃねえの」

買いかぶりだ。私がいかに閉鎖的人間関係に安穩としていたから、えみりは私のことで相談出来る相手がいなかった。他の誰も、私をよくは知らない。私に一番近いのがえみり。これは正しい。けど、えみりに一番近いのが私。これは間違い。

「まさか」

乾いた笑いと共に否定すると、

「なんか、お前見ると、鬱になるんだよね。うじうじしてて、国枝みたいな度胸がねえし。理屈こねるし」

深見は独り言のように言った。ポケットからライターだけを出して、フリンジを鳴らす。天へ伸びる火のゆらゆらと揺れる様を見ている。ライターの中にある透明な液体は、風が凧いだ屋外で不完全燃焼することなく熱と化し、大気へ溶ける。

「ごめん」

嫌みをたっぷり練り込んである、ごめん。ああ、私って謝ってばっかだ。乾いた笑みが浮かぶ。

「津森って、謝れば許されると思ってとこあるだろ。口先だけで謝んなよ。汚い大人のすることだろ。赦しをたかってるみたいでさ、不快になる」

視線を炎に据えたまま、落ち着いた口調で淡々と深見は言った。事実を人づてに伝える風に、怒りも呆れもはらんでおらず、それ故に残酷な宣告だった。

あはは、と私は深見の冗談に笑う。

「そうだね。謝って許されるなら、ケーサツ、要らないね」

謝っても警察は許さないけど、謝れば法律は優しくなる。進退窮まった私は、そう胸の奥で言い返して、自分をなだめてみた。深見のせいで、癒されない心はカラクリを暴かれまたひとつ傷付いた。息を止めて涙をこらえる。

ごめんと言う私に、悠志郎は「驚きました」と言い、子猫は「いえいえ」とほくそ笑み、えみりは「どうして」と訴く。薄っぺらい言葉で赦しを乞う私は、いったい、誰の手を引けば救われ

るのだろう。きっと誰の手も、私を引き上げようとせず払い落とすだろう。私が本心からすまないと思わないために。

「ともかく」

手首を曲げ、炎をライターから垂直に伸ばしながら深見は会話に区切りを付ける。

「国枝を悲しませるな」

私は柵に両腕をつながれたまま返事をしなかった。

深見はえみりを置いてタイに行く。彼が私という人間の存在と介在を許したのは、ひとえにえみりとの接点を保つため。彼は本来、私のようないじけた自己中人間を好まない。だから、深見が私を扉にしてえみりに触れるとき、言いようのない悲しさが込み上げる。選ばれる者と選ばれぬ者が明確に色分けされてしまうから。

「どうして、人であんなごった返してるのよ」

「夏の海ですから」

「なにも、海にばかり来なくたっていいじゃない」

「俺たちが言いますか……？」

少し碎けて来た悠志郎の口調には、楽しむような響きがあった。私は眼下に海を見はるかしながら、登るつもりがなかった丘頂を目指す。五歩程間を開けて、ゆったりした歩調の悠志郎が続く。海と反対側、道なりに立ち並ぶのは物置小屋かと思紛うような民家。海風に晒されて黒くなめされた木々の壁、ぽっかりと洞のように暗く開いた扉のない入り口、かかる簾、干された魚、錆びた自転車。太陽は軌道の中程に到達し、海の喧騒を厭うて砂利に行く私たちもあまねく照らす。白砂のように光る砂利に、私たちの影が濡れたように落ちている。磯の香が風に紛れ込み、パラパラとむきだしの腕や太ももを叩く。

前方にY字路が現れた。片方は海へ下り、見たところ、浜には出ずコンクリートの防波堤をなぞるコースになるらしい。もう片方はすぐに山の手へ湾曲してしまい、どこへ続くかはわからなかった。

「ねえ、どっち行く？」

夏の海に似つかわしくない、厚ぼったいマッシュルームヘアを期待して振り向く。が、背後には誰もいなかった。発熱するかのように白っぽい道が真っ直ぐに続いている。あまりに均整の取れ過ぎた風景。

「小里君？」

ひとり、異郷の地へ放り出されたような心淋しさが胸を撫でて足をすくう。無人ながら完成された、小さな小さな港町。海水浴場のざわめきが聞こえない。波音が飲み込んでしまった。

戻ってみようか。

戸惑いつつ踏み出した足と砂利のこすれる音が、やけに、耳の近くで聞こえて立ちすくむ。

視界の端で風景ががさりと動いた。黒い民家の壁から分離する人影。その人影が当然のように私へ向いた。右手に持つ者を左手で指して示す。

たったそれだけの仕種で。

彼の表情すらわからないのに。

私は息が詰まりそうになる。

世界はちゃんと地続きなのだを知る。私の馴染む場所とここを隔てるのは、ほんの一時間程の時だと気付く。つながっている。私はちゃんと。悠志郎を通して。

「すみません、ちょうど店があったので」

速足で近づく彼の手から、くしゃくしゃにしわのよったビニール袋を抜き取る。何度も使いまわされた後のものなのか、手の平へ油や手垢の粘り気を残した。

「何これ」

「昼ご飯です」

「まさか」

私は悠志郎を直視する。

そこに入っていたのは、牛乳とおにぎりと、レモン。

「津森さんも食べますか？」

「いい。おにぎりだけもらう」

パック入り、三百ミリリットル、九十八円のレモンティーを喉をならして飲む。乾いた喉に染みて行く。味はいつものものと変わらない、都会の味がした。

Y字路の手前。私はコンクリートの防波堤に腰を下ろし足を揺らす。

隣で胡座をかく悠志郎は、一リットルの牛乳パックにレモンを丸々ふたつ搾っていた。

「私、前、レモンティーに牛乳入れたことがある。牛乳とレモンがくっついて、だまだまになって、すぐくまらなかった。牛乳の滓みたいなのが浮いて、見た目もひどかったし」

「でしょうね」

「試したことあるの？」

「一応あります」

「どうだった？」

「ゲロマズでした。紅茶で薄まってたからよけい」

なら、紅茶で薄まっていなければ構わないという単純な論理なのだろうか。

悠志郎は、さらにガムシロップを大量に投入した牛乳パックの口をいったん閉じて、上下に振った。

「それも似たような味でしょ。どうして飲むの？」

彼はザパザパと振る手を止めて、牛乳パックを凝視する。唇に爪を添える。

「けっしておいしくはないんですけど。どちらかと言わなくてもマズイんですけど」

唇に立てた爪をよじる。

「ロマンじゃないですか？ 青汁みたいな」

「ロマン？ なぜ？」

「俺にもわかりません」

私は彼の言うロマンの何たるかを考え、彼は自身の冒険心の出所を探る。悠志郎はしばらく唇をいじり倒していたが、諦めたらしい。またザパザパと軽快な音を立て始めた。少しうるさい。

「私も飲んでみる。スプーンとコップもらうか買うかして来るから、ちょっと待ってて」

飲むと言われて驚いたのか、マッシュルームヘアが跳ねた。髪の毛の割れ目から、こちらを見る瞳が見える。眩しそうに細められた目を覆う眼窩は相変わらず擦り切れたように暗い。

「泡立った牛乳は嫌だからね」

「ええはあまあ」

悠志郎は相槌を重ねながら、牛乳パックに視線を落とした。

ちり取りや物干し竿も並ぶ萬屋で、透明なプラスチックのカップを買う。牛乳を注ぐと、固形物が浮遊する様がありありと見て取れた。

「ありえないくらいガムシロップ入れた方がおいしいですよ」

「そうなんだ」

白っぽい、細菌が湧いたような液体。眉間に縦じわが刻まれるが、どうしようもない。

悠志郎はと見れば、あれ以上ガムシロップを足すこともなく、平気な顔をして飲んでいる。それほど酷い味でもないらしい。私はコップを少し傾けて、舌でなめるようにして賞味した。

あまりの酸っぱさに、舌が一勢に畏縮する。牛乳のまろやかさとガムシロップの甘味はどこへやら、舌と喉を突き刺す酸味だけがやたらと目立つ。私は大慌てで瞼を上下させ、焼け爛れそうな粘膜の痛みをこらえた。

「予想よりまずくはないね」感嘆とともに付け足す。「酸っぱいけども」

今度はまともに一口を飲む。目尻に涙が滲んだ。吐き出したくてたまらない。続きを飲めるかもわからない。胃袋が拒絶反応を起こして競り上がった。全て飲んだなら、きっと胃袋は酸にやられて穴を開けるだろう。ストレスが胃を刻み付けるように、シクシクと痛む。ただでさえの炎天下に加えての心臓まで乱す刺激に、汗が一気に吹き出した。

これは、酷い。

飲み干した酸っぱい液体はまだ、口の中や喉や胃袋を痛め付けている。健やかで甘い牛乳も沢山のガムシロップもレモンの前では形無しだ。ここまで酸っぱい牛乳を、どうして彼は好むのだろう。牛乳のまどろむような甘さを、どうして残酷な形で殺してしまうのだろう。

「よく飲むの？」

「だいたい毎日、一リットルくらい飲みます」

白い残り滓のついたカップを手の中で握りしめて、私は悠志郎に向き直る。

「背、あまり高くないのにねえ」

舌の上で笑い声を転がす。

対して悠志郎は、無然としたように頬を浅く膨らませるだけ。特別な反応は無く、私のからかいは空回りをする。

「前髪を上げて」

嗜虐心が私を突き動かす。カップを持たない手でその分厚い髪をかき上げる。両手を上げ拒否の仕種をしていた悠志郎は、凍り付けられたように停止した。

彼の見開かれた目が私を捕らえる。

背筋を駆け抜ける鳥肌。羞恥をたえ、私はその瞳を凝視した。彼の瞳を絶対に逸らさせないように。

初めてまともに見る彼の目はやはり、どこか倦むような気配を漂わせている。厭世的なそれは、自身を否定しつつ他人を睥睨する傲慢さ。臆病な精神病患者の目。吸い込まれるのではなく、弾き返されるような透明さ。青白い白目の中で震える黒点と睨み合っていると、観念したのか瞳は次第に落ち着きを取り戻す。瞠目が治まる。前髪を奪われた衝撃が、岩間に染み入る水のように彼の奥へ引いて行く。呆けた口元が鋭利に結ばれるのが視界の端で見えた。

「前髪は、俺のネバーランドなんです」

手の平に感じる彼の額は冷たくすべらかで、老化を知らない。押し殺した低い声には臨界点を越えた懊悩がある。

さっきとは違う意味で、私の舌が痺れた。羞恥を底から塗り替えるように、予感めいた危機感が全身を駆け抜ける。

「これは壁で、あると落ち着いて、津森さんと俺が、違う人間だって理解出来る」

「それは、一方的過ぎるよ。前髪が邪魔で、私には、あなたが何を考えてるかすらわからない」

「前髪がないと、どうなるかわかりますか？」

私の視線を避けるように瞳を下に遣った悠志郎は、前髪を掻き退ける手首を掴む。徐々に手首へ圧力がかかる。私は奥歯を食いしばった。そうでなければ、悲鳴が漏れてしまう。

「何も見えなくなります。何も感じられなくなります」

血の気のない彼の頬。飲み込む唾液の音がした。指先に伝わる震えと、湿った汗の感触。ますます強くなる握力。下方に視点を定めながらも見開かれた瞼。前歯で噛まれた唇。

ああ、そうだ。彼にとって、私の手を払いのけることは、たやすい。

全身から緊張が抜け、そのまま筋肉が緩んだ。私の腕の痛みは、彼の必死の葛藤。

「津森さんから俺を隔てる壁がなければ、恐怖に心が閉じてしまう」

責め苦が彼の表情を縦に分断する。

私は自分のブラウスの胸を掻き抱いた。喉を突き刺す熱を押し止める。それでも、鼻の奥が熱で詰まった。

「私は」

私は。

あなたに何を言えばいいのだろうか。

怖がらなくていい。私はあなたを傷付けるつもりもないし、拒絶するつもりもない。信じて欲しい。

けど、同じ苦しみを知らない私の言葉をいくら並べても、全てが彼の前では詭弁に思えた。慰めも同情も虚しく弾けてしまう。

「ねえ、もしも、世界に私とあなたしかいなかったら、あなたはどうしてた？ それでも、今みたいにここにいる？」

「津森さんと俺だけが、ですか？」

「そう」

悠志郎は意志に反してわななく口唇を懸命にまとめながら、言葉を紡ぐ。

「想像が、出来ません」

丸く細い顎先から、透明な汗が落ちた。

「津森さんは、一人で津森さんじゃありませんから。俺が、前髪を下ろさずにはいられないように」

瞼を一度押し潰すように閉じて開く。涙を張った瞳が私を見据えた。

「津森さんは、いろいろな人から作られていますから」

関を切って、何かがなだれた。

私の心を支えていたものがその力を失い、紙切れのように宙を舞う。怒涛の奔流に飲み込まれる。

私を飲み込んでいた海が透き通り、私は真夏の防波堤にいる。

口を開いて、降り注ぐ太陽を仰いで、わあわあと一心に泣いた。そういう夢を見た。現実の私はぎりぎりのところで踏み止まって、涙をこらえる喉が声を出せないのもかまわず彼に問う。

「私は一人じゃないの？」

「ええ」

「本当に？」

「本当です」

力強く受け合う彼の言葉に、私は今度こそ泣いた。

ほんの少しだけ。

隣に立つ悠志郎の目が頻繁に私の手首を確かめる。あまりに強く締め上げられたせいで、痣と内出血で赤黒くなってしまった私の手首が、気になるのだろう。その罪悪感に、前髪をヘアピンで無理矢理上げさせられている緊張とがまぜこぜになって、彼の眉はほとんど泣きそうに垂れ下がっている。私は気付かないふりをして、電車の時刻表を調べる。

「今から帰ったら、二つくらい授業受けられるかな」

「どうでしょう。もうとっくに昼をまわってますし」

腕時計をはめていない悠志郎は駅の時計を振り返った。

夏だからと海に来て塩びたしになる人間もいれば、電車をいつものようにゴトゴト走らせる人間もいる。こんなところまで来て海にも山にも触れずに帰る私たちは、神の目で見れば後者の人間で、今はまだ、逃げ出すことを許されない。茫洋とした意識を、太陽でけぶる線路にたゆたわせる。ホームは青く暗く、線路は光って白っぽい。今にも熱に犯されて溶けだしそうな。私はどうしてこんなところにいるのだろうと思った。

「次の電車まで三十分近くあります」

「田舎だね」

「あせっても仕方ないですね」

私は痣のある手首をさすった。それだけで骨がうずくような痛みがある。

「あの」

「何？」

「さっきはすみません」

「うん。何度も聞いた。でも私、怒ってないよ」

「でも、それじゃ、なんでピン、」

「それとこれは別」

「よくわからないんですが」

悠志郎は手首の内側を両目に当てるようにして顔を隠す。両腕で顔と視界を覆って安心したのか、震えるため息を漏らした。

「さっき牛乳飲んでくれたでしょう？」

私は頷く代わりに彼を見上げた。

「牛乳って、給食に出たじゃないですか。なんか変だなと思って。健康に育つための飲み物が、あんなにおいしくていいのかなと」

「私は牛乳苦手だったな」

「俺も苦手だったら、あんな変な飲み方してなかったですね」

「不運だったんだ」

「不運だったんでしょうか？」

「不運だったんだよ」

彼の指が頭皮を押しように曲がった。

「そうだと、幸せですね」

悠志郎を見つめる。彼の言葉を聞き取りづらくする、瘦せて骨張った腕。白い腕はとても涼しそうに佇んでいた。

私も、彼の真似をする。

手の平の向こうには、ホームのひさしで細長く切り取られた空。それは晴れて晴れて、どこまでも彼方にあって、でも私たちは翼を持たないから電車に乗る。潮のかおりが人気のないホームに立つ私を包み込んでいる。背中を押すようになだらかな風。蝉がふっと鳴き止んで、ここは、本当に静かだ。

オマケ

ディレクターズカット版

「ササあ、心配したんだよお。電話しても携帯つながらないし」

塾に戻ると、ちょうど休み時間だった。教室に入るなり正面からタックルをかます要領で抱き着かれ、私は言葉を失う。

「事故かなんか、スゴイのに巻き込まれてるかもって、ずっと落ち着かなかったよ」

そういえば、携帯は電源を落としたままだ。慌てて電源を入れると、えみりからのメールと着信が山のようにあった。

「ごめん」

「無事だったらいいのお」

私が何の気掛かりもない姿で戻って来たことがそんなに大層なことなのか、えみりは私の両手をお守りのように握って放さない。少し鼻声になって、甘ったるい口調がさらに間延びしていた。

「小里君も一緒だったの？ 前髪すっきりしたねえ」

「うん。まあね」

「そう、ですか。嫌、なんです、けど」

私は前の質問に、悠志郎は後の質問に答える。彼女にどんな表情で応じたらいいかわからない。中途半端な微笑を浮かべ、悠志郎を振り返る。前髪を上げたままの彼は、首まで血で染め上げた極度の緊張状態にあった。目が高速で浮遊している。

「楽しかった？」

サプライズプレゼントを言い出されたような、幸せを待ち受ける笑顔でえみりは訴く。その笑顔は、彼女の視線が首を斜に傾げた私から悠志郎へ移ると曇った。

「喧嘩したの？」

私の曖昧な態度と、青ざめた悠志郎を見比べる。私の手を握る手に怯えが走った。

「してないしてない。ちょっと海が混んでて残念だったの」

頭を素早く振る。すねた顔をして、下唇を尖らせる。目玉を左上に回して肩もすくめると、えみりはやっと気負いを外したように、胸をへこませた。

「そっかあ、がっかりだね。夏はどこも混んでるもんね」

そう言いながら、鞆から紙包みを取り出す。

「じゃじゃーん。ウサギさんストラップー！ ビーズで作ったの。あたし、ササ怒らせちゃったでしょ。ごめんなさい。心配性なんだもん、おばあちゃんみたい。仲直りしてくださいっす」

天真爛漫な笑顔が、ほんのわずかこめかみの辺りで引き攣っていた。かわいらしい凝ったデザインのギンガムチェック。その紙包みが差し出される。包みには、えみりの細くて綺麗な指が食い込んでいた。

「してくださいっす？」

上目使いで小首を傾げるえみり。

それを見て、あは、と私の中から空気が漏れた。

私はどれだけ、えみりを傷付けたんだろう。えみりは、自分の友達を軽蔑する子じゃない。軽蔑しろと頼まれれば、逆に自身の過失を疑う子なのだ。一方的に嫉妬して罵って、被害者ぶって。そんな私を前に理由も何もわからないまま、彼女は自分を責めた。ビーズでウサギを作った。

「ありがとう」

紙包みを受け取る。えみりの肩から力が抜けた。

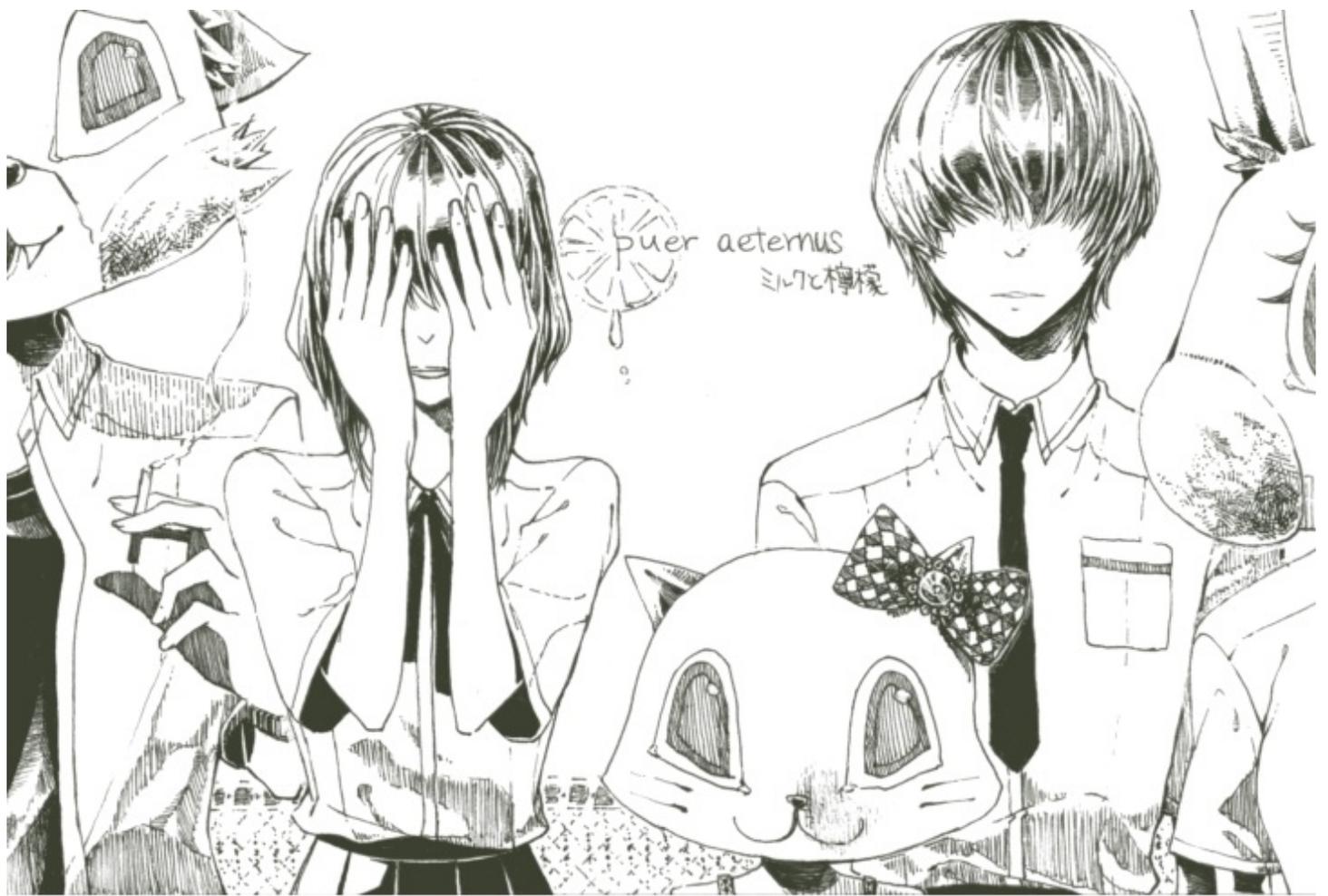
謝っていいのだろうか。私は、今、あなたに謝ってもいいのだろうか。今なら、心から謝れる気がするのだ。

愛らしい紙包みを見つめたまま動けないでいると、悠志郎がよかったですね、と背後でつぶやいた。

余計なお世話だ。

足踏みばかりしている自分に腹が立つ。立ち止まる背中を蹴り飛ばすように、前を見た。

そして、大きく息を吸い込んで。



読了ありがとうございました。
ミルクと檸檬は、
ミルクと檸檬を混ぜ合わせたら
酷いことになるよなあ……
という下らない発想に基づいて書かれたものです。
あの不思議な味と見た目は少し癖になります。
また、飲んでみたいです。
では。

ここまで読んでくださったあなたに多謝!!



Author : Taichi Masuoka

Site : [精神安定剤](#)

Twitter : [libs92](#)